

## 報 文

## ヴォーリズ設計の吉田家住宅に関する研究 — インテリアと家具の特徴 —

片山勢津子（京都女子大学教授）

A Study on Yoshida House designed by W. M. Vories  
— Characteristics of its interior space and furniture —

Setsuko Katayama

Yoshida House (1913) is an early work produced by William Merrell Vories as a model house. It has a simple and rational room planning characterized by the style before and after the War of American Independence. A Japanese guesthouse with a thatch-roofed tea room was added as an outbuilding to it, which is compatible with the change of life.

As a result of actual surveying, it proved to be built by two-by-four construction and Japanese traditional measuring system and use American building materials.

Among surviving furniture, valuable and various furniture were confirmed, such as Bruno Taut's furniture, Western furniture produced in Japan, craftsman style furniture, reimported furniture and furniture of English origin.

### 1. はじめに

本研究は、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（1880-1964）が設計した吉田悦蔵の住宅（1913）のインテリアを対象に、残存する家具を含んで考察を行うものである。悦三（1890-1942）はヴォーリズが近江八幡の商業学校に英語教師として着任した時の生徒で、ヴォーリズ合名会社の創立メンバーであり、近江兄弟社設立にも貢献した人物である。

作品数の多いヴォーリズだが、大半は中流階級の住宅で、吉田家はこれらヴォーリズ住宅の先駆けで、100年以上住み継がれて今日に至る貴重な作品である。この住宅については故川崎衿子の先行研究<sup>1)</sup>があるが、図面が公表されていないことに加え一部誤りがあることが判明したため、改めて実測調査を行い、建築だけでなく、この家に残る家具の特徴についても調査対象とし、日本の家具史に寄与することを目的とする。

### 2. 吉田家住宅の変遷

増改築の概要を表1と図1に示す。大きな変化としては、竣工2年後になる大正4年（1915）の茶室移築による和館の付属屋の建築、大正14年（1925）に行われた玄関やテラス設置など日本の生活に合わせるための増改築、昭和6年（1930）の来客増加による増改築、昭和36年（1961）の三笠宮殿下投宿のための改装、などである。なお、大正14年に建てられた女中部屋については、キッチンと茶室の間に位置したとされるが、詳細については不明である。

洋館のキッチンや女中室、子供室、階段の位置には合理的かつヴォーリズ特有の優しさが反映される。彼の設計した住宅数の膨大さを考えると、日本の住宅の近代化への貢献は想像以上に大きかったのではないかと考える。

表1 吉田家住宅の変化

(敷地内の他の建物は省く)

年	概要
1911(M44)	設計
1912(T1)	着工
1913(T2)	竣工
1915(T4)	八幡神社から茶室を移築
1925(T14)	玄関・テラス・キッチン・女中部屋を増築
1930(S5)	洋館2室増築、屋根裏改築、離れ和室浴室増築
1961(S36)	三笠宮殿下逗留のため、茶室屋根葺き替え、浴室改装、便所増築
1975(S50)	離れ和室改築
1979(S54)	屋根・外壁修理
1994(H6)	火災のため浴室・台所を改築

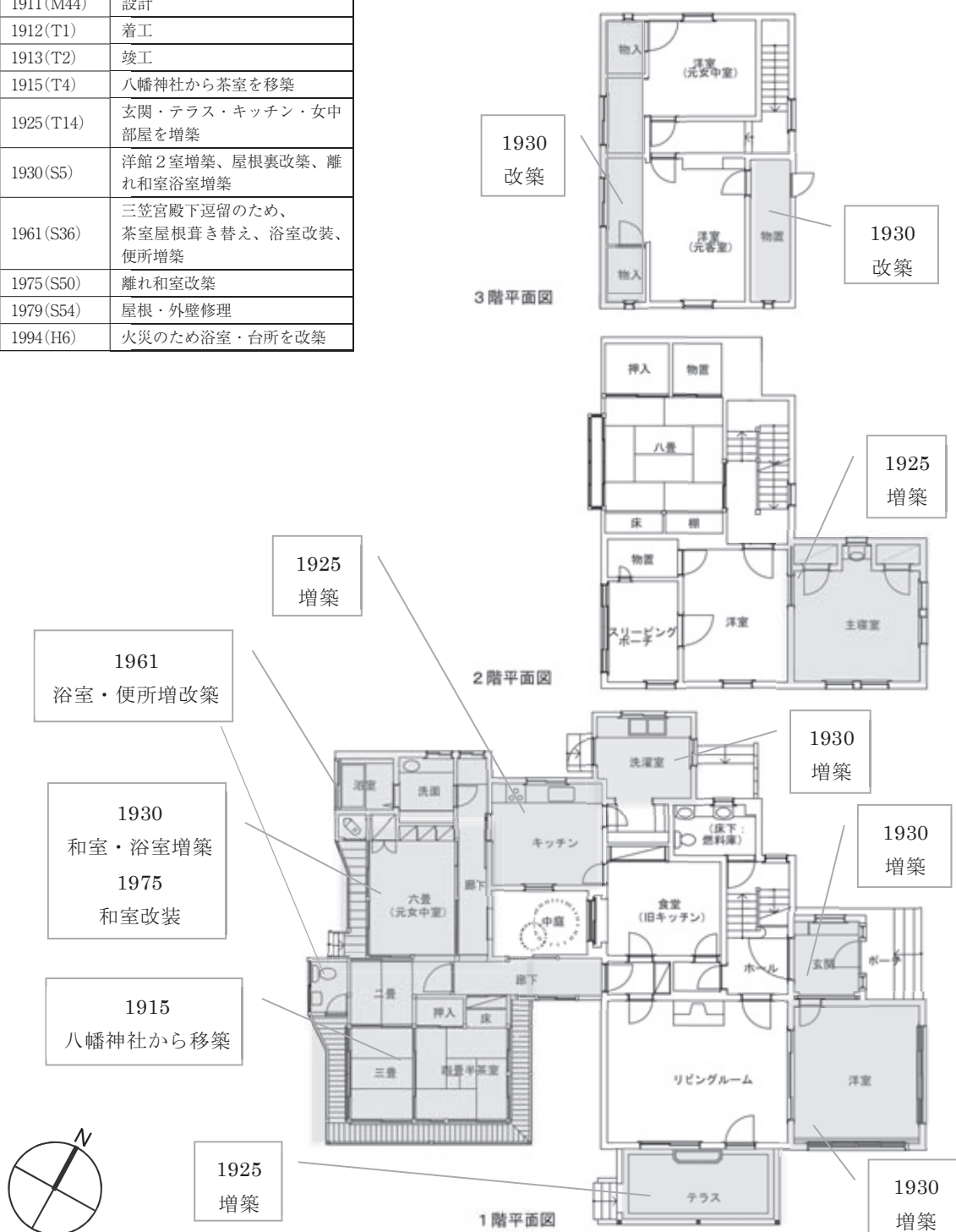


図1 吉田家住宅の現状平面図

### 3. 吉田家住宅の特徴

#### (1) 初期の洋館

敷地は、近江ミッションが手にした近江八幡市池田町の約1000坪の土地で、ウォーターハウス邸（1913）、ヴォーリズ邸（1914）と共に計画された。明治44年（1911）に設計されたが、アメリカから取り寄せる建築部材の到着が遅れたため、竣工予定が大幅に遅れた。計画には、当初の建築部を支えたチェーピンとヴォーゲルらアメリカ人建築家に関わったが、悦蔵自身も加わって母親と住む新居として設計が行われた。モデルハウスを兼ねて作られ、和室があるもののアメリカ独立前後の様式の特徴を備えており、興味深い。屋根裏を含めると木造3階建、1階中央に暖炉のあるコロニアル様式の間取りに特徴的なフェデラル様式の玄関ポーチがつき、浴槽一体型の水洗便所が階段踊り場につき、寝室にはスリーピングポーチがつく。非常にコンパクトなアメリカンスタイルを取り入れた衛生的かつ合理的なプランである。工事は、関西学院ミドルスクール校舎（ヴォーリズ設計）を担当した中川辰三郎が担当した。

設計当初の図面から、2階の和室に母親が、洋室に悦蔵夫妻が、3階北側は女中部屋、南側はゲストルームとして予定されたことが確認できる。スリーピングポーチはアメリカで流行していたが、日本の生活に合わなかったようで、すぐに納戸的な使用に変わったと思われる。この図面には各部屋の大きさが尺貫法で記載されているが、実測の結果、構造材に貼られた壁下地材の面を基準とし



図2 現在の吉田家住宅（洋館外観）

た寸法であると考えられる。尺とフィートでは若干の誤差が生じるが、扉や窓などの海外から輸入した建築部材を現場で調整したことが、額縁の納まりなどから伺えた。従来通り尺貫法のモジュールを用いて2×4工法で建設し、アメリカの建築部材が応用できるということを、ヴォーリズらは認識していたと思われる。

#### (2) 和館の茶室

洋館に付随する和館の茶室は、悦蔵の母親が晩年の住まいとして購入したもので、八幡神社から移築された約300年前の建物といわれる。三方を自然木で支えられた縁側が囲む開放的な煎茶の茶室で、こちらも吉田家住宅の見どころの一つである。住まい方の変化を辿ると、三笠宮殿下の逗留場所や親族の住まいになるなど、母屋に続くこの離れが多様に使用されてきたことがわかる。吉田家に残る茅葺屋根時代の写真からは、煎茶茶室が洋館に風味を添えていた様子が窺える。この和館が洋館と2箇所で接続されていることによって、表と裏の動線が確保され、多様な用途を可能にしたと考えられる。100年以上にわたって建物が維持されてきたのは、2つの建物の特徴とそれをつなぐ回遊的な動線所以であろう。



図3 和館の茶室外観

#### (3) インテリア

ヴォーリズ設計の洋館と伝統的な和館は、インテリアにおいても対照的な趣を見せている。洋館の玄関の収納型傘立てやベンチ、壁際の巾木部分のホコリ溜りを防ぐヒモ材、居室の作り付け収納、1階と上階を結ぶ伝声管など、生活者への細やか

な配慮が見られる。装飾的なものは少なくシンプルな納まりだが、ドア枠にはプリンス（Plinth：柱を支える台座）が付き、様式的ルールに則っていたことがわかる。一方の茶室は、古材や丸窓、曲がりくねった自然木など、煎茶趣味が随所に見られる。

#### (4) 家具

吉田邸には、和洋家具ともに状態良く残るが、ここでは洋館にある興味深い家具について以下に概要を記す(数字は確認した個数を示す)。

##### 【軽井沢彫】

外国人の避暑地であった軽井沢で生まれた外国人好みの和風装飾を施した洋家具で、ヴォーリズも愛用した。吉田邸のものは全て桜の彫刻で、2階書斎に残る机1(図5)椅子1のほか、ネストテーブル2、小テーブル1、センターテーブル1、が残る。軽井沢にあったヴォーリズ別荘の隣家に「一彫堂」という軽井沢彫家具店があったことや、同社資料から一彫堂製と判断した。

##### 【クラフツマンスタイル】

アーツ&クラフツ運動に刺激を受けたスティックレー（Gustav Sticley）によって、アメリカで流行した家具スタイルで、「ミッションスタイル」

とも呼ばれ、上記の一彫堂にも資料が残る。吉田家ではテーブル1を確認した。ヴォーリズ住宅のダイニングテーブルには必ず見られるどっぷりと



図5 軽井沢彫のデスク引出し



図4 居間の様子



した家具で、ヴォーリズ建築内部の独特の雰囲気は、多分にこの様式の家具からきていると考える。

#### 【国産洋家具】

様々なスタイルのものがあ、レストテーブル1（大中小）、本棚2、ジャコビアン風椅子1、ソファセット1（ソファ1、安楽椅子2）、籐座様式椅子（図6）4、金華山張り椅子1、肘掛の短い椅子2、曲木椅子1、花台1、バタフライテーブル2（図7）、エクステンションテーブル1、洋服ダンス1、鏡台1がある。一見、海外製に見えるが、彫りが浅いことや木の注ぎ方から日本製と判断した。居間のソファセットは、同時期に建設されたナショナルシティバンクの椅子と共に製作され、座面はコイルスプリング式で脚元に彫刻が施されている。当時は籐張りの家具が流行したが、吉田家住宅に残るのは座のみ籐張りで、小型の曲木椅子も籐張りである。

#### 【竹素材の家具】

2階階段室で棚1（図8）を確認した。アメリカの通販カタログにある Bamboo Goods の corner



図7 バタフライテーブル



図6 籐座の様式椅子



図8 竹素材の家具

shet だと推定する。竹は軽量で老朽化しにくく抗菌成分が含まれることから、西洋で需要があり日本等アジアで輸出用に製作されていたようである。おそらく洗濯物を入れるための家具であろう。なお、上記のカタログには、ヴォーリズ六甲山荘(1934)に残るネストテーブルと酷似した竹製家具も確認できたので、こうしたアジア趣味の家具がアメリカで流行し、さらにそれを日本に逆輸入していたことがわかる。

#### 【海外製家具】

輸入品と思われる幾つかの家具(アーツ&クラフツ風家具5(図9)、ナースングチェア1(図10)、



図9 アーツ&クラフツ風の机と椅子



図10 ナースングチェア

スタッキング本箱3(図11)、スチールパイプのベッド2(シングル1、ダブル1(図12))、折りたたみ椅子1(図13)を確認した。

居間のアーツ&クラフツ風家具は、オーク材を黒く染色し真鍮の装飾があるので、海外製だと判断した。机1、椅子1、本棚1、台1、がセット(図4の正面壁画)なので、新居のために母親が購入したと伝わる家具かもしれない。

ナースングチェアはイギリス発祥の授乳用椅子で、赤ん坊を抱いた姿勢を考慮して、座面が低く



図11 スタッキングブックケース



図12 スチールパイプのベッド





図13 折畳み椅子

背もたれが高い、肘掛付きのゆったりした椅子である。恐らく外国人から譲り受けたものだろう。現在は黄色の皮でカバーされている。

斑杣の木目が美しいガラス扉のスタッキング式本箱は楽器入れと伝わる家具だが、元来はイギリスの弁護士が愛用した書類入れである。欧米では、今も人気のある家具の一つである。

スチールパイプベッドはアメリカの通販カタログに掲載されているものと酷似した輸入品である。

折畳み椅子はシンプルな形態ながら、こうした折畳み椅子が、戦前戦後を通じて日本でも作られて広く普及していることから、その原型であろう。

【ブルーノ・タウト設計の家具】(図14)

ヴォーリズが設計した下村邸(1932)で、タウト(Bruno Taut 1880-1938)からヴォーリズが譲り受けた家具2組が吉田邸に残る。いずれも素朴なスツールと甲板の組み合わせ家具で、スツールとテーブルの二通りの使用ができる貴重な家具である。



図14 ブルーノ・タウト設計の家具

【和家具】

長持ち1(春慶塗)、懸硯1、鏡台2、漆塗りのタンス2、桐箆筥5、塗り箆筥2、側箆筥1、帳場箆筥1、棚2、文机1、座卓(螺鈿)1、衣桁1、針箱2(一つはランプに転用)がある。嫁入道具と思われる箆筥類が多いが、塗りのものは仙台出身であった悦蔵の長男の嫁入の嫁入道具だと思われる。また、鏡台1(図15)は姫鏡台と呼ばれる小型の鏡台で、大正時代、若い女性に人気があったことから、悦蔵の双子の娘、信子と孝子が使用したものと想定できる。



図15 姫鏡台

### 【その他】

ヴォーリズ設計の建具に特徴的に見られるクリスタルの把手のついた家具1(図16)が入口ホールにある。その特徴からヴォーリズ事務所の設計と考えられる。この他、座面がチェスト形式の西洋中世風の家具1が、キャスターが後付けされ、ホールに隣接した小室に残る。形から、どこかの教会から持ち込まれたものではないかと思われる。



図16 ヴォーリズの家具

## 4. まとめ

吉田家住宅はいわゆる和洋併設住宅だが、和館ではなく洋館を主な居住空間とした中流家庭の住宅である。洋館の合理的な間取り、掃除しやすさを考えた巾木部分の納まり、装飾を省いたインテリアを見ると、ヴォーリズのキリスト教精神が窺える。こうした質素で合理的な考え方が、日本人に受け入れられ、ヴォーリズの作品の多さにつながったのではないかと考える。玄関が増築された洋館は、まるで現代の住宅を先取りしたかのような近代的な間取りである。これと対をなす趣ある茅葺の和館と、和洋2館を結んだ循環型プランが、1世紀以上に渡る生活の変化に対応できた秘訣だろう。そして、住まい手のヴォーリズに対する崇敬の念によって大切に使われ、過去の家具の状況

をも知ることができる。

実測の結果、大工による木造枠組壁工法の構造で、壁下地の内法は尺貫法でできている。アメリカから輸入した建築部材を使用しているが、フィートとの寸法体系の違いは現場で調整していることが確認できた。

家具は建物ほど寿命が長くなく、持ち運びが可能であるため、製作場所や時代の特定はなかなか困難である。しかし調査の結果、ヴォーリズがクラフツマンスタイルの家具や軽井沢彫りの家具を愛用していたことが確認できた。このほか吉田家住宅には、国産洋式家具やイギリス発祥の家具、ジャポニズムの家具などが混在していたわけで、アメリカの家具については、百貨店の通販家具として販売されていたことも確認できた。吉田家住宅は、ヴォーリズ研究だけではなく、日本の家具史にとっても、近代の家具の実物を知ることのできる貴重な建物である。

なお、本調査後の平成29年11月17日に、和洋館とレンガ造の壁が、県指定有形文化財（建造物）に選定された（家具23点を含む）。

### 【謝辞】

本調査において、悦蔵の孫で吉田家住宅に長年住まれた吉田与志也氏、大阪芸術大学の山形政昭先生、家具デザイナーの小長谷光氏、家具師の黒瀧道信氏、横山家具の横山忠志氏、ナショナルトラスト京都事務所、近江兄弟社の皆様、またゼミ生であった雑賀千遥、原田茉奈、浅川桃子、西田知世ら諸姉のご協力を得ました。ここに記して御礼申し上げます。

### 脚注

- 1) 川崎衿子：明治・大正間の洋風住宅の由来と住まい方に関する調査報告書、文教大学女子短期大学部、2000

### 参考資料

- 1) ウィリアム・メリル・ヴォーリズ：我が家の設計、文化生活研究会、1923
- 2) ウィリアム・メリル・ヴォーリズ：我が家の設備、文化生活研究会、1924



- 3) 山形政昭：ヴォーリズの住宅「伝道」されたアメリカンスタイル、住まいの図書館出版局、1988
- 4) 金井雅之：今世紀初頭の米国におけるクラフツマン・スタイルについて ii - 起業家・デザイナー、ギェスタッフ・スティックレイについて、デザイン学研究、No. 68, 日本デザイン学会、1988
- 5) 鍵和田務、上田友彦：軽井沢における木彫用家具(1) ～軽井沢彫の遠隔～、デザイン学研究、日本デザイン学会、2001
- 6) 南美慧：軽井沢彫家具の研究とデザイン 彫りと装飾をめぐって、武蔵野美術大学博士（造形）学位論文、2013
- 7) 神戸芸術工科大学 HP：「神戸家具」の変遷と可能性（2015. 10 閲覧）
- 8) Macy Athena Press: American Department Store and Mail Order Catalogues, 1870-1940, Part 2: Mail Order Catalogues 1915-1930, vol. 2, vol. 5